

♪♪♪ 宗次ホールおすすめ公演情報 2016年10・11月 ♪♪♪

チケットのご予約は 宗次ホール チケットセンターへ 052-265-1718(営業時間10:00-18:00)

いよいよ芸術の秋も本番、10月は37公演ご用意して皆様をお待ちしております！今月は特にピアノ公演が充実しており、世界の国際コンクールで入賞する新鋭から、超個性派まで様々なラインアップ。お得なスイーツタイムコンサートのシリーズもここにご紹介しきれなかった物も含め13公演ございます！皆様のご来場、お待ちしております。

(文責:宗次ホール企画担当 廣田 政子)

フランス随一のバロックアンサンブル ストラディヴァリア 室内楽

10月11日(火)18:45開演 4,000円(学生2,400円) [指定]



バロック・ヴァイオリンの名匠、ダニエル・キュイエさんが結成したアンサンブル「ストラディヴァリア」は本来大編成のバロック専門楽団。楽団の拠点であるフランス・ナント市は年に一度開催されるフランス最大級のクラシック音楽の祭典ラ・フォル・ジュルネの本拠地であり、ストラディヴァリアは日本

での同名の音楽祭及び新・福岡古楽音楽祭などにも度々出演、グラモフォン誌でも「その優雅さ、熟練の技術、気高く美しい演奏に驚かされ、何度も繰り返し聴きたくなるはず」と絶賛されるグループです。上の写真はリーダー／音楽監督であるキュイエさん。今回キュイエさんを含む4名の選抜メンバーで、宗次ホールのみのスペシャル・プログラムをお届けします！

来演メンバーの一人、チェリストの酒井淳(さかいあつし)さんは1975年名古屋生まれ、現在オペラの指揮活動などもされる、ヨーロッパで引っ張りだこの名手です。桐朋学園大学特任教授も務めておられ、その演奏はレコード芸術でも高評価。まさに名古屋が誇るべき音楽家と言えるでしょう。

この日演奏される演目の1つ「ヴァイオリンソナタ」の作曲者コレッリ(1653-1713)はJ.S.バッハやヘンデルより32年、そしてヴィヴァルディより25年年長のイタリアの作曲家であり、ヴァイオリニスト。ヴィヴァルディもコレッリの後を受け合奏協奏曲を発展させたり、J.S.バッハもコレッリの作品をもとにオルガンのための作品を作曲、そして1931年にはラフマニノフが「コレッリの主題による変奏曲」を作曲したりと、後の作曲家達に多大な影響を及ぼした人物。

「心が躍る！」(朝日新聞)と絶賛される、ストラディヴァリアの繊細でかつ芳醇な音に酔いしれてみませんか♪

ショパン・エリザベート王妃国際ファイナリスト！ ロシアのピアニストはやっぱりすごい

ドミトリー・シシキン ピアノ

10月22日(土)17:00開演 3,500円(学生2,100円) [指定]

2015年ショパンコンクール(ワルシャワ)及び今年のエリザベート王妃国際コンクール(ブリュッセル)でファイナリスト、と世界三大ピアノコンクールの内2つでファイナリストとなったシシキンさん。今年1月に愛知県芸術劇場で行われたショパンコンクール受賞者ガラコンサートで、シシキンさんの実演にふれた方もいらっしゃるかもしれません。コンクールの場でも、そして音



↑シシキンさんのInstagramより
「ポケモン」と名付けられた小犬と

楽に限らずバレエなどでもやはりロシアといえば圧倒的な力を感じますが、ピアノ教育に関しても、ロシアではまず指の鍛え方から全く違うそう。ロシア人の骨格が美しいのはバレエダンサーなどを見ても一目瞭然ですが、指に関しては幼少の頃から鍛えているので、筋力が強いそう。筋が強ければ、まっすぐ伸ばしたままで強いタッチ、引っ張るようなタッチなど自由自在です。確かにシシキンさんの演奏をインターネットで拝見しても、その足の長い蜘蛛のような指は、わりと真っ直ぐに伸ばされたまま。よくもまあ、もつれないものだと思わされる速さでなんと軽々と鍵盤の上を駆け回っています。シシキンさんの演奏を聴いた人はその硬質な音を「刃物のような鋭さ」と表現したり、「孤高の帝王」とよんだり。インタビューなどの場では多くを語らない寡黙な性格のようですが、上の写真のように可愛らしい面もあるようです。そしてこの日のプログラムも、モーツァルトからやはり楽しいショパン、そしてドビュッシーに本国ロシアのスクリャービンとチャイコフスキーと、かなり盛りだくさん。バラエティ豊かな演目です。

これからますますピアニストとしての才能を開花させていく24歳のピアニスト、シシキンさんのロシアン・ピアニズムに圧倒されること間違いなし、です。

お得なスイーツタイムコンサート！

13:30開演 2,000円 自由席 ※終演15:00予定

プレゼントチケット(ギフト券セット購入のおまけ等)2枚で入場可能

★チャリティーシート(指定席)AB列中央付近23席限定

スイーツタイムコンサートは、これからクラシック音楽をじっくり聴いてみたいなあという方、夜は出かけづらいので昼間に本格的な演奏を楽しみたいなあという方にぴったり。国際的にも活躍するベテラン演奏家から気鋭の若手までが登場。みな2,000円ではお得すぎるほどの素晴らしい演奏家たちです。ご期待下さい！

その音も、美しさも、存在自体がセンセーショナル 10月15日(土)ヴァンサン・ラルデル ピアノ



ハンサムなラルデルさんのキラシを見て、手に取られた女性のお客様、何度もお見かけしました！アメリカの有名音楽雑誌「ファンファーレ」でも「その色とりどりの音色…センセーショナル！」と評されるピアニストです。モーリス・ラヴェルが作曲したバレエ音楽「ダフニスとクロエ」は同作曲家の「ボレロ」に並ぶ管弦楽曲の主要レパートリーのひとつですが、この日のピアノ独奏版はラルデルさんが、

作曲家自身の注釈付のものを受け継ぎ、完成させたという超貴重版。ファンファーレ誌でも“ラルデルはピアノの中にオーケストラを聴いている”とその豊かな音色を絶賛。普通ピアノの楽譜というと、右手にト音記号、左手にヘ音記号の2つの行から成りますが、ラヴェル自身による独奏版には“オプション＝任意”としてもう1つの行が加えられています。腕が3本無いと弾けないのか…?! いえ、ラルデルさんのようなテクニックの持ち主は、それをも弾きこなしてしまうのです。

それほどラヴェルの音楽に精通していながらも、指揮者ダニエル・カフカさんとのインタビューでは“ラヴェルのスペシャリスト”と呼ばれることを避け、“それぞれのアーティストが自分個人の美学を尊重すべきだ”と話すラルデルさん。芸術家として彼が最も大切にしているのが「センシユアル(官能的)な音と色彩、精彩豊かな音色」だそう。ラヴェル作品に漂うなんとも言えない色香と、その魔法のようなオーケストレーションを、どのようにピアノで表現してくれるのでしょうか! もちろんラヴェルだけでなくドビュッシーの「映像」や大曲ブラームスのソナタ第3番も。全く同プログラムの東京公演は¥6,000です! ¥2,000で聴けるなんて、またとない機会。土曜日ですので、普段学校やお勤めでスイツタイムへのご来場が難しいご家族・ご友人もお誘いの上、ぜひ皆様でお越しください!

「最初の一音から聴衆は息を呑んだ」

ダーグブラーデット紙 (スウェーデン)

10月18日(火) マリアンナ・シリニヤン ピアノ

音楽は自分にとって“大切”なものを超えて“不可欠、根本的”なものだと話すシリニヤンさん。音楽一家に生まれた彼女は母親のお腹の中にいる時から音楽と共に生きてきたと振り返ります。生まれながらにして音楽家である彼女はミュンヘン国際音楽コンクールで5つもの賞を受賞、今回待ち望まれた初・本格的日本ツアーです。

今回はショパン盛りだくさんのプログラム。「初めてピアノに触れ、音を出した時からショパンの音楽と共に歩んできた」と話す彼女。今回日本でのリサイタルデビューにあたり、プログラムの後半はショパン作品で構成してくれました。どうぞお楽しみに。

“並外れて音楽的なギタリスト”…NYタイムズ紙

11月1日(火) ラファエラ・スミッツ ギター



今回来演するスミッツさんの演奏するギターは、なんとも表現しがたい温かい音。8弦ギターを弾きこなす彼女の演奏は「どんな演奏家を持ちうるものをも上回る“ハート”をもっている」と世界中で絶賛されています。アメリカのギター・ファンデーションが行ったスミッツさんへのインタビューを少しご紹介したいと思います。

○初めてスミッツさんに会ったとき、小柄な女性が特大

サイズのギターケースを2つも持って現れたのが印象的でした。“並外れて音楽的”と評されるスミッツさんの演奏ですが、演奏中は何を考えていますか? 指使いなど?

●時々。もちろんどの声部(パート)がどこへ向かっているか、何を言わんとしているか、そして何を意味しているかを考える必要があります。それは例えるならばオーケストラのようなもの、もしくは大きな物語、森羅万象と言えるかもしれません。音楽作品について“考える”より“感じる”こと。これが一番大切です。

指使い、座り方、暗譜…これらは全て物理的な側面です。例えば住居に例えるとわかりやすい。

○住居に例えるとは?

●人の家を訪れる時、その建物に用いられている石材や木材等、材料のことを考えることはありません。むしろ、その家の中に存在し、そこに住む人の歴史を刻んできた物に心や愛着を感じるはず。その心が“住まい”を作るのです。新築の真新しい家は、綺麗だけれど、冷たく空虚感すら感じるものだから。



一宗次公演でも使用する、ジョン・ギルバード(1922-2012)の手による1980年製の8弦ギターを弾くスミッツさん。横で出番を待つのは、左からミルクール・タイプ(フランスのミルクール地方から。古くから楽器の産地として知られ、他の地域のギターに比べてややスリム)、そしてその右がアリア・ギター。

○一般的なギターは6本弦ですが、宗次公演でも使用される、スミッツさんご愛用のギターは8弦です。どのようにチューニングされているのですか?

●低い方の2本の弦のチューニングを、その時演奏する作品によって変えています。例えばバッハの無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータを弾くときと、リュート組曲第3番を弾く時とは、一番太い8番目の弦をそれぞれD、ラと全く違う音にチューニングしています。一番大切にしていることは、弾き易さと楽譜に書かれている内容を如何に忠実にギターという楽器で演奏するか、という点です。

○どのようにレッスンをを行っていますか?

●文章で考えるとフレーズのどこが句読点にあたるのか、どこで息継ぎをすると自然か、どこがあなたの“叫び”なのか? そして問いかけ、その答えは? など。

音楽を通してどのように“話す”か、シンプルに考えてもらうように教えています。問いかけ一つにしても、様々な問い方が存在します。シンプルな問いかけ、疑いを持った問いかけ…その内容を頭ではなく心から理解したとき、更に深く音楽を掘り下げていくことができると思っています。

例えば、私は日本語を理解できませんが、フリガナ通りの日本語をそのまま読んだとします。レストランでメニューを注文するくらいならそれでも通じるかもしれませんが、もっと複雑な内容の文章…詩や、哲学的な物語を読むとすれば、きっと聞き手が努力して理解しようとしなければ、通じないでしょう。複雑な文章になればなるほど、内容を理解した上で抑揚やアクセント、息継ぎの箇所などを、適切な場所に置かなければ通じにくくなるからです。

最後にスミッツさんは、「たくさん音楽家に会い、様々な異なる楽器の演奏に触れてください。私達一人一人が、出会う全ての人から何かしら学ぶことができるのです。知恵はたった一人の人間からでなく、貴方が出会う全ての人から修得できるのです。人生は、本当に豊かです。多くの人に出会って一期一会を大切に、様々な場所に出かけて下さい」としてインタビューを締めくくっています。

スミッツさんの人柄や人生観まで感じられる様なその実演に触れることで、また一つ豊かな経験が増えそうです。

チケットのご予約・お問い合わせは

宗次ホールチケットセンターへ

☎ 052-265-1718